

集団(家族・友人・大学・アルバイト先)に対する 帰属意識と自尊感情および他者受容との関連

諸星 眞子¹⁾・山口 一²⁾

¹⁾ 桜美林大学大学院心理学研究科

²⁾ 桜美林大学

The Association between Sense of Belonging to a Group (Family, Friends, University, Place of Employment) and Self-Esteem and Acceptance of Others

MOROHOSHI Mako¹⁾, YAMAGUCHI Hajime²⁾

¹⁾ Graduate School of Psychology, J. F. Oberlin University

²⁾ J. F. Oberlin University

抄録

人は他者との間に関係を築き、集団に所属し生きている。集団への帰属意識は、日常生活において重要な概念であるといえる。青年期に該当する大学生においても、家族集団、気の合う友人集団、大学での特定の授業やゼミ・サークルなどの集団、アルバイト先での被雇用者集団など、様々な集団に所属しているが、今までの研究では、帰属意識は大学という集団に対して不適応との関連が調べられているのみであった。また、集団への帰属意識と自己の精神的健康に必要な「自尊感情」や組織や集団への適応を考える上で重要な「他者受容」との関連は調べられていなかった。

そこで、本研究では青年期にある18～25歳の男女大学生を対象に、家族や友人、大学、アルバイト先といった様々な集団に対する帰属意識について、質問紙による調査を実施した。また男女別に各集団への帰属意識と自尊感情や他者受容との関連について調査した。その結果、家族に対する帰属意識の高さは男性より女性が高いことが判明した。各集団への帰属意識の高さについては、男性は友人>家族>アルバイト先>大学の順番で高い結果となり、女性は友人、家族>アルバイト先>大学の順番で高い結果となった。また、相関分析の結果、男女とも各集団への帰属意識が高いことが自尊感情が高いことに、女性では友人への帰属意識が高いことが、男性では友人、家族、アルバイト先への帰属意識が高いことが他者受容が高いことに有意に関連していることが示唆された。さらに、どの集団にも帰属意識を持たない人に比べ、帰属意識の高い集団を3種類持つ人は、自尊

感情や他者受容が高い結果となった。そこで、社会への適応を高めるためには、大学に限定せず様々な集団への参加とそこでの帰属意識を高めるように働きかけることが重要であると考えられた。

キーワード：帰属意識, 自尊感情, 他者受容

1. 目的

人は他者との間に関係を築き、集団に所属し生きている。青年期に該当する大学生においても、家族集団、気の合う友人集団、大学での特定の授業やゼミ・サークルなどの集団、アルバイト先での被雇用者集団など、様々な集団に所属している。一方で、そうした中でその集団に適応できないこともよく起こる。たとえば、大学という集団に適応できない者は多い。文部科学省(2014)の調査では、2012年度の年間の大学中退者は79,311人という結果が出ている。全学生数が2,991,573人であるので、全大学生の2.65%が1年間に中退していることになる。また、休学者は67,654人おり、全大学生の2.26%が休学をしていることになる。

心理社会的発達理論(Erikson, E. H., 1950)によれば、青年期はアイデンティティを獲得し、社会に出て他者との親密性を築く前の時期に相当する。このような大切な時期に、集団に対する不適応が起こると、自尊心の低下などの心理的不調を作り出し、その後社会への不適応につながることも多いと考えられる。内閣府(2016)の若者の意識に関する調査(引きこもりに関する実態調査)では、15歳から39歳の若者のうち、引きこもりと考えられる数は54.1万人、率にすると1.57%であるが、引きこもりの状態になったきっかけを聞いたところ、「職場になじめなかった」(23.7%)と「就職活動がうまくいかなかった」(20.3%)が多く、仕事や就職への不適応がきっかけとなり、ひきこもりとなった者が多かった。これに加え、「不登校(小学校・中学校・高校)」(11.9%)や「大学になじめなかった」(6.8%)もかなり多く存在し、職場を含めた集団ないし共同体への不適応が、引きこもりにおおいに関連していることがわかる。

よって、社会全体に対する不適応を作らないためにも、大学生のうちに不適応防止のための対策が必要と考えられる。これまでに不適応の防止につながるような、個人と集団との関係については様々な研究が行われているが、その中の一つに集団への帰属意識の研究がある。

帰属意識は“集団への満足感や信頼感、一員である誇りや支持などを指している”(尾高, 1963)とされる。人は集団に入り、様々な個性を持ったメンバーと関わる中で互いに影響し合い学ぶことがあり、援助関係を含む友情が確立し、加えて互いに安心感が出現し、自分を出すことができ、その結果、その集団に対する帰属意識が生まれ、その集団が心の居場所となる。一方で集団に適応できない人は、孤独感を深めたり、自尊心が低下したりして抑うつとなることもある。中村・松田・薊(2015)の調査結果によれば、大学へ

の帰属意識が高いと大学満足度と就学意欲がともに高く、大学への不適応は低い傾向を示している。また、北川・藤井(2012)の家族・地域・組織・国家の4種類の共同体に対する帰属意識と人の暮らしへの満足感を表す主観的幸福感との関係を調べた調査では、“帰属意識が当該共同体内での安心感や役割意識、他者からの情緒的な援助の享受等の要素を高め、主観的幸福感に正の影響を及ぼしている構造となっている”という結果が出ている。文部科学省(2017)も、“自己肯定感をバランスよく育むには、自然体験活動や集団宿泊体験、職場体験活動、奉仕体験活動、文化芸術体験活動といった様々な体験活動を通じて、達成感や成功体験等を得るとともに、失敗や挫折を経験したときに、自分を受け入れ、課題に立ち向かう姿勢を身に付けることが重要である”と自尊心を増すための学外での集団活動を奨励している。このように青年期において、学外での集団体験の有効性は言われているものの、大学以外の集団に対する帰属意識に関する調査は行われていないのが現状である。

本研究では、大学生にとって重要な集団として、大学以外に家族や友人、アルバイト先という様々な集団に対する帰属意識の高さについて検証する。また、男女により各集団に対する帰属意識の高さに差があるのかについても検証する。

さらに、各種集団への帰属意識と、自己の個人的健康に必要である「自尊感情」や組織や集団への適応を考える上で重要な「他者受容」との関連についても検証する。中間(2013)によれば、自尊感情は古くから個人への適応や心理的健康に必要なものとされ、内田・上埜(2010)は、自尊感情が高い者は、肯定的な自動思考も抱きやすく、自尊感情が低いものは否定的な自動思考を抱きやすいことを示した。一方、上村(2007)によれば、他者受容は他者や社会との調和の志向に関連する極めて重要な概念であり、他者受容が高いことは社会への適応性が良いことにつながると考えられている。各集団に対する帰属意識と「自尊感情」や「他者受容」との関連を検討することは、社会への適応に関する帰属意識の重要性を確認するものとなるであろう。

最後に帰属意識が高い集団の種類が多い場合に自尊感情や他者受容に違いがあるかについて検証する。各集団の帰属意識と自尊感情や他者受容との関連に加え、複数の分野の集団に対する帰属意識が高いことが肯定的な結果をもたらすか判明することで、様々な分野の集団に所属するよう働きかけることの有用性が判明するからである。

以上の分析を通じ、帰属意識の肯定的な側面が自尊感情の面からも他者受容の面からも明瞭となるであろう。その結果、本研究が、大学生が社会に出て集団と関わる中で不適応となることを抑止するための方策を導くうえでの有用な基礎的資料となることが期待される。

2. 対象と方法

2.1 調査対象者と調査時期

A大学の本研究の調査実施を承諾した青年期にある18～25歳の男女大学生を調査対象

とした。桜美林大学研究倫理委員会の承認（2018年7月13日承認，受付番号17043）後，2018年7月～10月の期間に調査を実施した。

2.2 実施方法

A大学で教えている教員に調査協力を依頼し，調査への承諾を得られた教員の講義終了時に，調査の趣旨，目的，対象，調査方法，プライバシーの保護，調査拒否の自由および調査を拒否した際にも不利益な対応を受けない等の倫理面への配慮を記載した調査協力依頼書と質問紙を一人一部ずつ配布し，口頭説明を5分程度行った。対象者には無記名で回答してもらい，当日または翌週の講義終了後に回収した。

2.3 質問紙の構成

1) 対象者の属性に関する質問項目（年齢，性別）

2) 家族・友人・大学・アルバイト先に対する帰属意識

大学への帰属意識尺度（中村ら，2013）のうち，愛着の1因子7項目を，大学以外の家族や友人，アルバイト先にも使用できるように，質問内容を一部改変して使用した。大学への帰属意識尺度の愛着因子は信頼性が高く，大学満足度，大学不適応，就学意欲と最も相関が高く帰属意識の特徴を最も表していると考えられる。なお，アルバイト先に対する帰属意識については，現在アルバイトをしているかを尋ね，アルバイトをしていると回答した人の回答を使用した。「全くあてはまらない」～「よくあてはまる」の6件法で回答してもらった。

3) 自尊感情

Rosenberg, M. (1965) による Rosenberg 自尊感情尺度を Mimura, C. & Griffiths, P. (2007) が邦訳した日本語版の1因子10項目を用いた。自尊感情尺度（日本語版）は信頼性・妥当性を備えた尺度として自尊感情を測定するため多くの研究で用いられている。「全くそう思わない」～「強くそう思う」の4件法で回答してもらった。今回の研究では帰属意識と自己を肯定的に捉えているかとの関連を調査するために用いた。

4) 他者受容

櫻井（2009）による他者受容尺度を用いた。他者受容尺度は1因子17項目からなり，櫻井（2009）により信頼性，妥当性が明らかとなっている。「とてもあてはまる」～「全くあてはまらない」の5件法で回答してもらった。今回の研究では，他者受容が集団への適応の指標になることから使用した。

2.4 分析方法

得られたデータは、IBM SPSS Ver.25.0 を用いて分析した。

大学への帰属意識の尺度は表現を少し変更したため、家族、友人、大学、アルバイト先の各集団について再度因子分析を行い、因子構成を検討した。他の、Rosenberg 自尊感情尺度（日本語版）、他者受容尺度はそのまま用いた。次に、各集団に対する所属意識や自尊感情、他者受容の大きさが男女で違いがないか t 検定を用いて調べた。また、男女別に各集団に対する所属意識の大きさに違いがないか一元配置分散分析を用いて検討した。上記各尺度間の関連は相関分析を用いて検討した。また、集団に対する帰属意識が高い集団の種類の数で自尊感情や他者受容が異なるのかを検討するために、帰属意識の高い集団の種類数を独立変数、自尊感情や他者受容を従属変数とした一元配置分散分析を行った。

3. 結果

3.1 配布・回収・分析対象者

大学生 359 名に調査用紙を配布し、回収されたものは 214 名分（回収率 59.6%）であった。そのうち、欠損値があるものなどを除き、205 名の調査用紙を分析の対象（有効回答率 95.8%）とした。

分析対象者の内訳は、男性 94 名（45.9%）、女性 111 名（54.1%）であった。そのうちアルバイト先に対する帰属意識を回答した人は男性 88 名、女性 102 名であった。また、年齢の範囲は 18 歳から 25 歳までであり、平均年齢は 19.9 歳（ $SD1.05$ ）であった。

3.2 各集団に対する帰属意識についての因子分析の結果

各集団に対する帰属意識についての因子分析の結果を表 1～4 に示す。スクリープロットから判断し、各集団に対する帰属意識尺度とも 1 因子構造と判断された。したがって、今後の分析では 7 項目の平均点を各集団の帰属意識として扱った。

表 1. 家族に対する帰属意識の因子分析結果 ($N = 205$)

項目	成分	共通性
問1. 4 家族が好きである	.951	.904
問1. 1 家族を気に入っている	.949	.901
問1. 5 私は、家族に愛着がある	.947	.896
問1. 6 家族の一員であることを誇りに思う	.945	.893
問1. 3 家族は、自分にとって大切な拠り所である	.942	.888
問1. 2 家族といると居心地がよくて、落ち着くことができる	.928	.861
問1. 7 私は、家族に受け入れられていると思う	.844	.712
因子抽出法：主成分法	寄与率	86.5%

表2. 友人に対する帰属意識の因子分析結果 (N = 205)

項目	成分	共通性
問2. 4 友だちが好きである	.932	.869
問2. 2 友だちといると居心地がよくて、落ち着くことができる	.913	.834
問2. 3 友だちは、自分にとって大切な拠り所である	.910	.828
問2. 6 友だちの一員であることを誇りに思う	.907	.824
問2. 5 私は、友だちに愛着がある	.902	.813
問2. 1 友だちを気に入っている	.890	.792
問2. 7 私は、友だちに受け入れられていると思う	.799	.638
因子抽出法: 主成分法	寄与率	80.0%

表3. 大学に対する帰属意識の因子分析結果 (N = 205)

項目	成分	共通性
問3. 4 大学が好きである	.941	.886
問3. 5 私は、大学に愛着がある	.928	.862
問3. 3 大学は、自分にとって大切な拠り所である	.925	.856
問3. 2 大学にいと居心地がよくて、落ち着くことができる	.924	.853
問3. 6 大学の学生であることを誇りに思う	.903	.815
問3. 1 大学を気に入っている	.875	.765
問3. 7 私は、大学に受け入れられていると思う	.851	.724
因子抽出法: 主成分法	寄与率	82.3%

表4. アルバイト先に対する帰属意識の因子分析結果 (N = 190)

項目	成分	共通性
問4. 3 アルバイト先は、自分にとって大切な拠り所である	.945	.892
問4. 6 アルバイト先の一員であることを誇りに思う	.941	.885
問4. 4 アルバイト先が好きである	.940	.884
問4. 5 私は、アルバイト先に愛着がある	.924	.854
問4. 2 アルバイト先にいと居心地がよくて、落ち着くことができる	.921	.849
問4. 1 アルバイト先を気に入っている	.915	.836
問1. 7 私は、アルバイト先に受け入れられていると思う	.806	.650
因子抽出法: 主成分法	寄与率	83.6%

3.3 男女別の各集団に対する帰属意識, 自尊感情, 他者受容の平均値とSD, 男女差の検討

各帰属意識 (家族・友人・大学・アルバイト先), 自尊感情, 他者受容について, 男女別に平均値と標準偏差 (以下SD) を表5に示す。

次に, 男女差の検討を行うために, 各集団への帰属意識および自尊感情・他者受容の得点について *t* 検定を行った。その結果, 家族に対する帰属意識について1%水準で有意な差が認められた ($t = -2.48, df = 181, p < .01$)。その他の集団に対する帰属意識, 自尊

表5. 各集団への帰属意識および自尊感情・他者受容の得点および t 検定の結果

	男性		女性		t 値
	平均値	SD	平均値	SD	
家族	4.82	1.16	5.19	.96	-2.48 *
友人	5.17	.76	5.30	.72	-1.18
大学	3.63	1.24	3.89	1.03	-1.62
アルバイト	4.20	1.36	4.26	1.00	-.38
自尊感情	2.47	.45	2.45	.44	.44
他者受容	3.78	.57	3.80	.54	-.28

* $p < .01$

感情、他者受容に男女差は認められなかった。

3.4 男女別の各集団での帰属意識の高さの差

男女別に各集団に対する帰属意識の高さに差があるか、アルバイト経験がある対象者について、被験者内の1要因4水準の分散分析を行った。結果、男性の各帰属意識間には有意な差がみられた ($F(2.47, 214.70) = 50.77, p < .01$)。Bonferroni法による多重比較を行ったところ、図1に示すように家族に対する帰属意識、友人に対する帰属意識、大学に対する帰属意識、アルバイト先に対する帰属意識の全ての組み合わせについて、1%水準で有意な差が認められ、友人 > 家族 > アルバイト先 > 大学の順番で高い結果となった。次

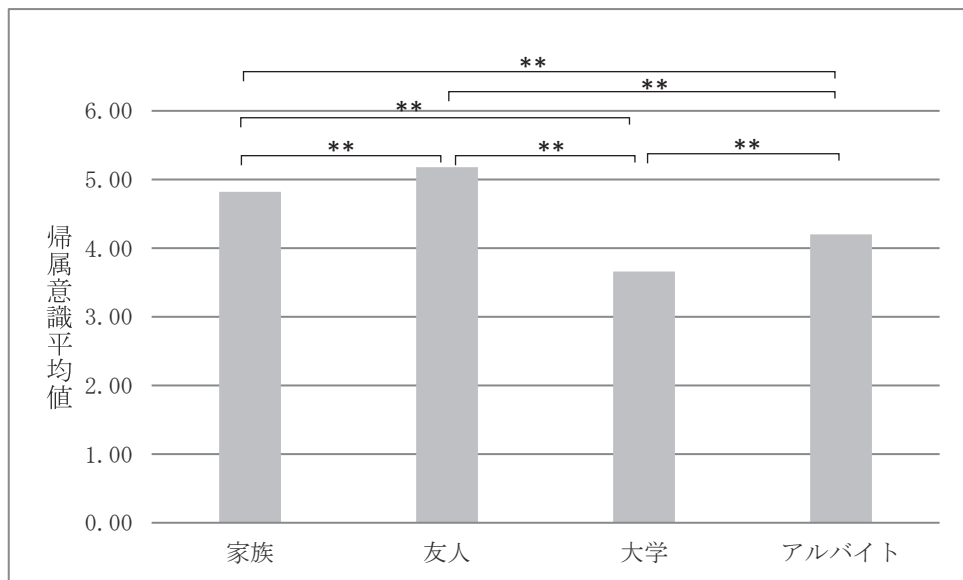
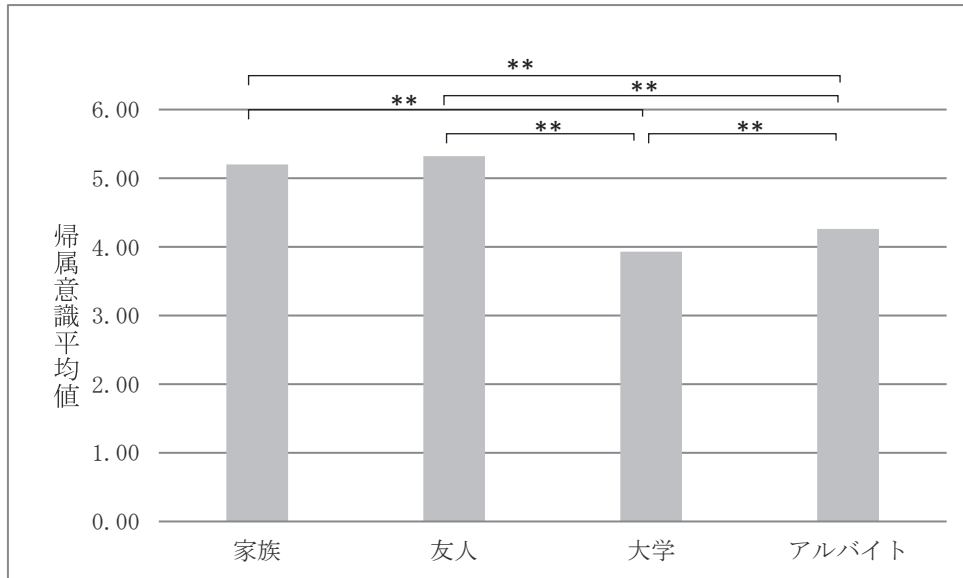
** $p < .01$

図1. 各集団に対する帰属意識の分散分析の結果 (男性)



** $p < .01$

図2. 各集団に対する帰属意識の分散分析の結果 (女性)

に、女性の各帰属意識間にも有意な差がみられた ($F(2.55, 257.64) = 72.60, p < .01$)。Bonferroni法による多重比較を行ったところ、図2に示すように友人と家族に対する帰属意識には差がないがそれ以外は1%水準で有意な差が認められ、友人、家族>アルバイト先>大学の順番で高い結果となった。

3.5 男女別の各集団に対する帰属意識と自尊感情および他者受容との相関

男女別に各集団に対する帰属意識と自尊感情および他者受容との相関を表6に示す。

結果、男性については有意な弱い正の相関が、自尊感情と家族・友人・大学・アルバイト先に対する帰属意識との間にみられた。他者受容については有意な弱い正の相関が、家族・友人・アルバイト先に対する帰属意識との間にみられた。また、女性については有意な弱い正の相関が、自尊感情と家族・友人・大学・アルバイト先に対する帰属意識との間にみられた。他者受容については有意な弱い正の相関が、友人に対する帰属意識との間にみられた。男女とも自尊感情には様々な集団に対する帰属意識が、他者受容には、男性は大学以外の帰属意識が、女性は友人への帰属意識が有意な弱い正の相関があることが判明した。また、自尊感情と他者受容の関連については、男性は中等度の相関があるのに対して、女性は低い相関となり、相関の程度に差があることが判明した。

表6. 各帰属意識と自尊感情および他者受容の相互相関 (男女別)

	家族平均	友人平均	大学平均	アルバイト平均	自尊平均	他者平均
男性 (n = 94)						
帰属意識 (家族) 平均	—	.630**	.552**	.315**	.377**	.207*
帰属意識 (友人) 平均	—	—	.510**	.377**	.290**	.383**
帰属意識 (大学) 平均	—	—	—	.373**	.265**	.194
帰属意識 (アルバイト) 平均	—	—	—	—	.386**	.319**
自尊感情平均	—	—	—	—	—	.402**
他者受容平均	—	—	—	—	—	—
女性 (n = 111)						
帰属意識 (家族) 平均	—	.513**	.194*	.082	.325**	.149
帰属意識 (友人) 平均	—	—	.282**	.215*	.292**	.314**
帰属意識 (大学) 平均	—	—	—	.336**	.324**	.038
帰属意識 (アルバイト) 平均	—	—	—	—	.334**	.166
自尊感情平均	—	—	—	—	—	.258**
他者受容平均	—	—	—	—	—	—

* $p < .05$ ** $p < .01$

3.6 帰属意識が高い集団の種類の数による自尊感情と他者受容

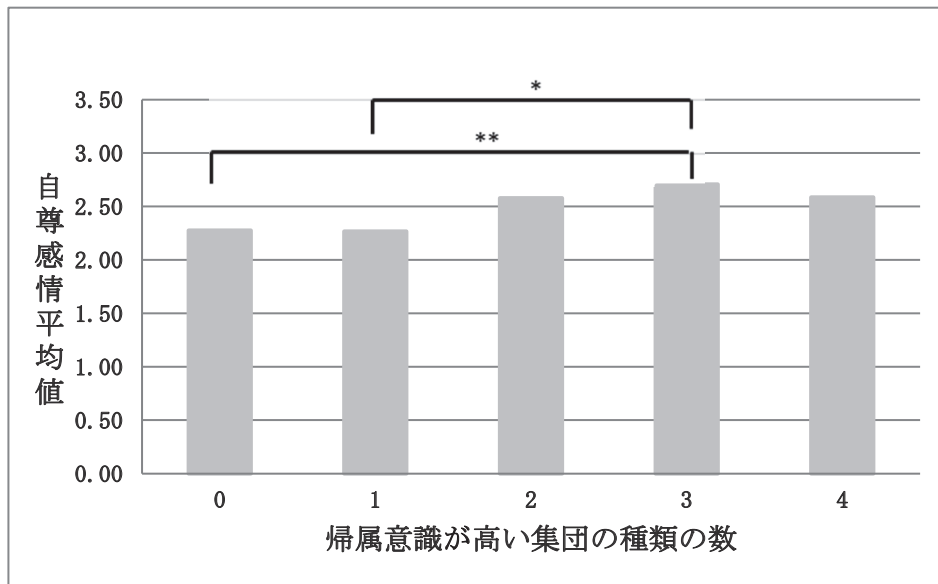
帰属意識が高い集団の種類の数によって自尊感情と他者受容の値が異なるのか、男女別に帰属意識の高い集団の種類数を独立変数とし、自尊感情、他者受容を従属変数として一元配置分散分析を行った。その際、帰属意識の高い低いは中央値を元に分けるものとした。なお、対象者の中にはアルバイトを行っているものと行っていないものが存在するが、アルバイト経験は対象者の選択で行っていることから一緒に分析することとし、アルバイト経験を行っていないものはアルバイト先に対する帰属意識が高くないとした。

男女別に帰属意識が高い集団の種類の数ごとに自尊感情と他者受容の平均値と標準偏差を表7に示す。分散分析の結果、男性においては「自尊感情」、「他者受容」ともに有意な差がみられた (自尊感情: $F(4, 89) = 3.88$, 他者受容: $F(4, 89) = 4.33$, ともに $p < .01$)。女性においても「自尊感情」「他者受容」ともに有意な差がみられた (自尊感情: $F(4, 106) = 4.07$, 他者受容: $F(4, 106) = 4.40$, ともに $p < .01$)。TukeyのHSD法(5%水準)による多重比較を行ったところ、男性の自尊感情においては3種類>1種類, 0種類であった。他者受容においても3種類>1種類, 0種類であった。女性の場合は、自尊感情が3種類, 4種類>0種類であった。他者受容は3種類>0種類, 2種類であった。多重比較の結果を図3~6に示す。

表7. 帰属意識が高い集団の種類の数による自尊感情および他者受容

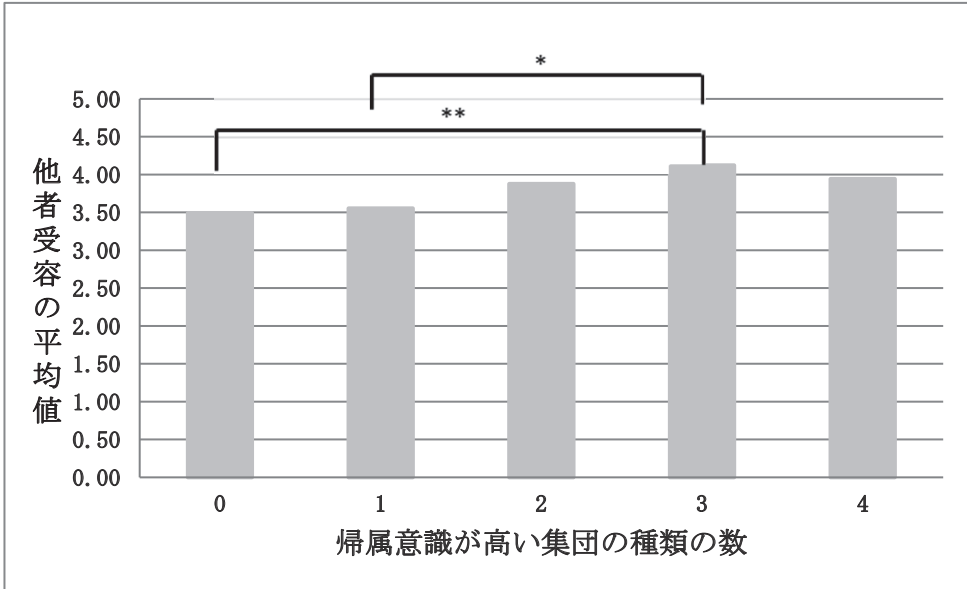
	※集団数	度数	男性		女性		
			平均	SD	度数	平均	SD
自尊感情	0	20	2.28	.52	14	2.14	.43
	1	18	2.27	.49	25	2.33	.44
	2	22	2.58	.31	30	2.46	.40
	3	14	2.71	.44	25	2.60	.42
	4	20	2.59	.35	17	2.64	.39
	合計	94	2.47	.45	111	2.45	.44
他者受容	0	20	3.49	.56	14	3.53	.55
	1	18	3.55	.58	25	3.80	.47
	2	22	3.88	.51	30	3.61	.53
	3	14	4.12	.54	25	4.08	.58
	4	20	3.94	.50	17	3.99	.40
	合計	94	3.78	.57	111	3.80	.54

※集団数とは帰属意識が高い集団の種類の数



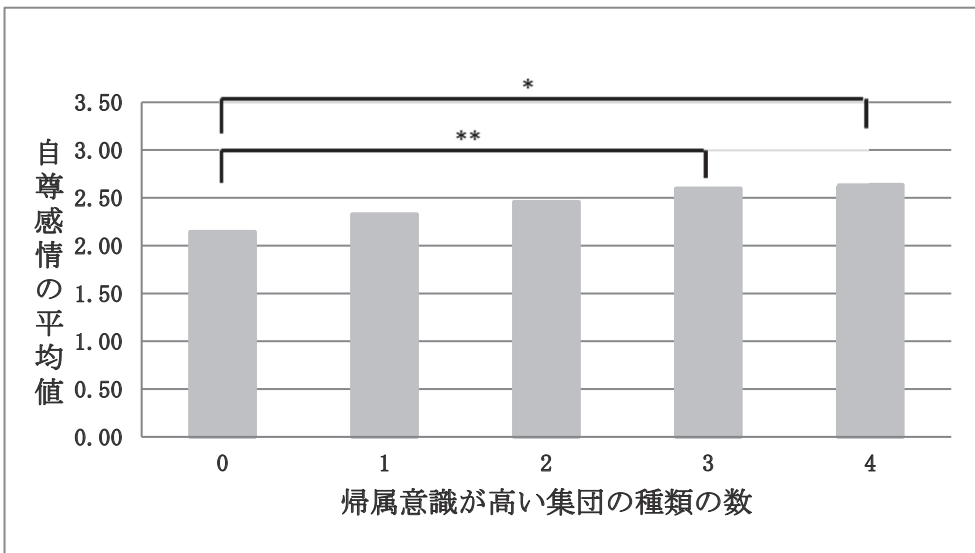
* $p < .05$ ** $p < .01$

図3. 帰属意識が高い集団の種類の数による自尊感情 (男性)



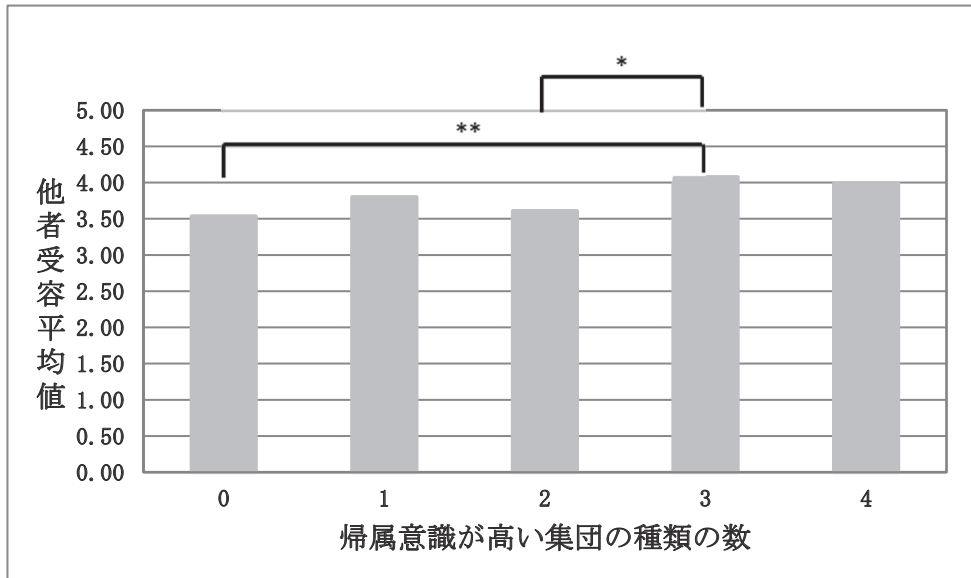
* $p < .05$ ** $p < .01$

図4. 帰属意識が高い集団の種類の数による他者受容 (男性)



* $p < .05$ ** $p < .01$

図5. 帰属意識が高い集団の種類の数による自尊感情 (女性)



* $p < .05$ ** $p < .01$

図6. 帰属意識が高い集団の種類の数による他者受容 (女性)

4. 考察

4.1 各集団に対する帰属意識, 自尊感情, 他者受容の性差

各集団への帰属意識および自尊感情, 他者受容の得点について性差の検討を行うために, t 検定を行った。その結果, 家族に対する帰属意識について1%水準で有意な差が認められ, その他の集団に対する帰属意識, 自尊感情, 他者受容に男女差は認められなかった。女性が男性に対して家族に対する帰属意識が高い理由として, 女性と男性の家族に対する意識の違いが反映しているためと考えられた。

4.2 男女別の各集団に対する帰属意識の高さの差

男女別に各集団に対する帰属意識の高さの違いについて分析を行い, 男性は友人>家族>アルバイト先>大学の順番で高い結果となり, 女性は友人, 家族>アルバイト先>大学の順番で高い結果となった。帰属意識は, 日頃から成員と密に接触したり, 若い頃から所属していて愛着がある集団に対しては高く, 大学のような他の集団と比べて規模が大きく, 自己選択があまり働かず, 集団に入ってから比較的時間が経っていない集団は, 愛着が生まれにくく, 帰属意識が低くなると考えられた。つまり, 各集団の規模, 集団に属してからの期間, 自己選択の程度, 成員間の密接性の違いにより帰属意識の高さが異なると考えられる。また, 男性の場合, 友人に対する帰属意識が家族に対する帰属意識より高いのは, 青年期は家族から心理的距離が離れ, 友人の方が家族に比して関係が密な集団と

なっている結果と考えられた。

4.3 男女別の各集団に対する帰属意識と自尊感情および他者受容との相関

男女別に各集団に対する帰属意識と自尊感情および他者受容との相関分析を行った結果、自尊感情の高さは、男女とも家族・友人・大学・アルバイト先の帰属意識と弱いながらも有意な正の相関があった。したがって、帰属意識が高いことは、男女ともどの集団にあっても自尊感情が高いことに関連があり、帰属意識が高まることは自尊感情に肯定的な影響を及ぼす可能性があることがわかった。他者受容の高さは、男性においては大学以外の3種の集団と、女性においては友人のみの帰属意識と弱いながらも有意な正の相関が認められ、男女で帰属意識との関連が異なることがわかった。この点に関しては男性と女性の集団に対する考え方の違いを表していると思われるが、先行研究に同様の研究がないため詳細は不明である。いずれにしても組織や集団への適応を考える上で重要な他者受容に関しては大学以外の集団に対する帰属意識が重要であると考えられた。

4.4 帰属意識が高い集団の種類の数による自尊感情と他者受容

帰属意識が高い集団の種類の数によって自尊感情と他者受容の値が異なるのか、男女別に帰属意識の高い集団の種類数を独立変数とし、自尊感情、他者受容を従属変数として一元配置の分散分析を行った。結果、男女とも帰属意識をどの集団にも持っていない人に比べ、帰属意識の高い集団を3種類持つ人は、自尊感情や他者受容が高いことが判明した。

池谷・葛西(2003)は、“自尊感情の向上には、対人関係を円滑に保つための対人関係能力の向上が必要である”と述べている。上村(2007)は、“他者受容ができることが、他者との共存や社会適応を志向することにつながる”と述べている。このことから、複数の帰属意識が高い集団を持つことは、集団に適応することにつながる可能性があると考えられる。したがって、複数の集団に所属することを勧め、帰属意識を高めることを働きかける方略が、社会に出て会社等の集団に不適応となることを抑止するためにも大切であると考えられる。

4.5 総合考察

今回の研究の成果として、まず、男女とも友人、家族に対する帰属意識がアルバイト先や大学に対する帰属意識より高かったことが挙げられる。この結果は、各集団の規模の大きさ、集団に属してからの期間、自己選択の程度の違い、成員間の密接性の違いにより帰属意識の高さにも差が出たと考えられる。また、各集団に対する帰属意識の高さは自尊感情と有意な正の相関がみられた。さらに男女とも他者受容と友人に対する帰属意識は有意な正の相関が認められ、男性の場合は家族やアルバイト先に対する帰属意識とも有意な正の相関があった。このことは、大学に対する帰属意識を高める方略より大学以外の集団に

対する帰属意識を高める方略が有効である可能性を示すものである。自尊感情と他者受容の集団への適応に対する重要性については先行研究が示している。内田・上埜(2010)は、自尊感情が高い者は、肯定的な自動思考も抱きやすく、自尊感情が低いものは否定的な自動思考を抱きやすいことを示した。自尊感情が低いと否定的な自動思考の下、対人関係に消極的になり、何らかの問題に直面したとき、対処できずますます自信を失う可能性もある。そのことが、集団への適応に悪影響を与えてしまうと考えられる。また、上村(2007)によれば、“他者受容は他者や社会との調和の志向に関連する極めて重要な概念であり、他者受容が高いことは社会への適応性が良いことにつながると考えられている”と述べている。他者受容が低いと他者や社会との調和がうまくいかず、集団に溶け込めないことにつながる可能性がある。

そこで、学生の中途退学や休学等の防止対策として、先に述べた文部科学省(2017)の提言のように大学に限定せず、学生同士や地域との交流機会が増える集団活動を奨励し集団への帰属意識を高めるように働きかけることが、個人の自尊感情や他者受容を高め、結果的に集団への適応力が高まり、大学の中途退学や休学を減少させることにつながるのではと考えられる。具体的には、クラブ活動やサークル活動、ボランティア活動などがこれに該当すると思われる。これらの集団活動は学生の自主性の上で行われ、比較的少人数での集団活動を通じ、自己理解、他者理解、社会の理解を深めながら、判断力・応用力・協調性・指導力が学べるということで、その集団に対しての帰属意識が高まりやすく、それが自尊感情の高まりや他者受容の促進を生むと考えられる。

最後に、複数の集団への帰属意識が高い場合、どの集団に対しても帰属意識を持たない場合に比べ、自尊感情や他者受容が高いことが判明した。大学等の単一の集団に所属するよう働きかけるだけでなく、種類の異なる複数の集団に所属するよう働きかけることが有効かもしれない。

4.6 本調査の限界と今後の課題

本調査の限界として、第一に集団の種類を家族、大学、友人、アルバイト先に限定し、それ以外の集団に対しての帰属意識について調査していないことである。今回の調査では、大学生の所属する主たる集団は上記4つであると判断して調査を行ったが、今後はもっと集団の範囲を広げて調査を行い、各集団での帰属意識の差を調査する必要があると思われる。第二に、帰属意識と他者受容の関連に対して男女差がどのようなことと関連して生じたのかが不明であることである。また、帰属意識と他の心理的指標との関連を調査していないことである。今後は、不登校や社会準備性に関連した様々な要因と帰属意識との関連を調べ、帰属意識の心理的重要性をさらに探求する必要があると思われる。

付記

本研究の作成にあたりまして、調査にご協力いただいた学生の皆様、同期の皆様へ深く

感謝いたします。また、調査にご指導・ご助言して下さった井上直子先生、池田美樹先生、浅井亜紀子先生、松田チャップマン与理子先生にも深く感謝しております。

文献

- Erikson, E. H. (1950). *Childhood and society*. New York : W. W. Norton. (仁科弥生訳 (1977). 幼児期と社会1 みすず書房, 仁科弥生訳 (1980). 幼児期と社会2 みすず書房)
- 池谷 貴彦・葛西 真記子 (2003). 児童の社会的スキルと自尊感情の向上に関する研究—ピア・サポート・プログラムの実践を通して—カウンセリング研究, 36 (3), 206-220.
- 北川 夏樹・藤井 聡 (2012). 帰属意識が主観的幸福感に及ぼす影響構造に関する研究 第46回土木計画学研究発表会・講演集
- Mimura, C. & Griffiths, P. (2007). A Japanese version of the Rosenberg Self-Esteem Scale: Translation and equivalence assessment. *J Psychosomatic Res.*; 62, 589-594.
- 文部科学省 (2014). 学生の中途退学や休学等の状況について. Retrieved from [http:// www.mext.go.jp/b_menu/houdou/26/10/1352425.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/26/10/1352425.htm) (June 1, 2019)
- 文部科学省 (2017). 自己肯定感を高め, 自らの手で未来を切り拓く子供を育む教育の実現に向けた, 学校, 家庭, 地域の教育力の向上 (第十次提言) Retrieved from http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/gijiroku/_icsFiles/afiedfile/2017/06/27/1387211_07_1.pdf (October 30, 2019)
- 内閣府 (2016). 若者の生活に関する調査報告書. Retrieved from <http://www8.cao.go.jp/youth/kenkyu/hikikomori/h27/pdf-index.html> (September, 2019)
- 中間 玲子 (2013). 自尊感情と心理的健康との関連再考: —「恩恵享受的自己感」の概念提起—教育心理学研究 61 (4), 374-386.
- 中村 真・松田 英子・薊 理津子 (2013). 大学生の学校適応に影響する要因の検討—大学不適応, 大学満足, 就学意欲に着目して— 江戸川大学紀要, 23, 151-160.
- 中村 真・松田 英子・薊 理津子 (2015). 大学への帰属意識が大学不適応に及ぼす影響 (3) —帰属意識に基づいて分類した大学生のタイプと大学不適応との関連— 江戸川大学紀要, 26, 23-31.
- 尾高 邦雄 (1963). 改訂版 産業社会学 ダイアモンド社, pp.398.
- Rosenberg, M. (1965). *Society and adolescent self-image* New Jersey: Princeton University Press. pp1-3.
- 櫻井 英未 (2009). 女子大学生の自己受容および他者受容と精神的健康の関係 日本女子大学人間社会研究科紀要, 19, 125-142.
- 上村 有平 (2007). 青年期後期における自己受容と他者受容の関連個人志向性・社会志向性を指標として 発達心理学研究, 18, 132-138.
- 内田 知宏・上埜 高志 (2010). Rosenberg 自尊感情尺度の信頼性および妥当性の検討—Mimura & Griffiths 訳の日本語版を用いて— 東北大学大学院教育学研究科研究年報, 58, 257-266.